

ハイデルベルク信仰問答より

問 48 しかし、人性が神性のあるところには、どこにでもないとするならば、キリストにある両性は、互いに分かれたるものではありませんか。

別訳：

「しかし、人間性が神性のある所どこにでもある、というわけではないのならば、キリストの二つの性質は互いに分離しているものではありませんか。」

答え 決して、そのようなことはありません。なぜなら、神性は無限に、到るところに存在していますから（エレミヤ 23:23-24）、神性は実際に、それが受け入れた人性の限界の外にもありますが、にもかかわらず、常に、同時に、人性の中にも存在し、人格的に人性と結ばれている（ヨハネ 3:13、コロサイ 2:9）、ということであります。

別訳：

「決してそうではありません。なぜなら、神性は捉えることができず、どこにでも臨在するのですから、確かにそれが取った人間性の外にもあれば、同時に人間性の内にもあって、絶えず人間性と人格的に結合しているのです。」

問 47 では、主イエス「不在」の不安と空虚さを味わった弟子たちの気持ちを考え、そのところから、主は本当に不在なのかということを改めて問い直しました。主イエスは今、肉体においては確かに地上におられません、聖霊によって私たちの内に住み、礼拝における聖礼典を通して力強く現臨しておられるという内容でした。

問 48 では、そこに少々込み入った内容の突っ込みが入ります。よほど考える人でなければ出てこないような問いです。主イエスの「人性」、つまり人間として得た肉体（栄化されたからだ）には（敢えて言うならば）物理的制約が伴うので、神なるイエスが世界のどこにでも遍在されるとき、両者は分離状態になるのではないかと言うのです。ここまで論理的一貫性を求めなくても、私たちの信仰は問題なく保たれます。仮にこのことを問わなくてはならない場面があるとするならば、それは聖餐式くらいでしょう。実際、「聖餐におけるパンと杯にキリストはどのように現臨しておられるのか」という問題は、16 世紀宗教改革時代に特に争われました。これについては、主に4つの立場があります。

【「聖餐」（レイマンスクールテキスト）p.7 より】

聖餐における「キリストの現臨」の理解は「実体論」と「象徴論」の二つに大別されるが、その中間に位置づけられるものもある。ローマ・カトリックは実体論、ルターはカトリックの立場そのものは採らないなりに実体論的、ツヴィングリは象徴論的、カルヴァンは象徴論に近いがキリストの臨在を主張する点で中間的な立場に立っている。「これはわたしのからだである」の「である」を、これら4つの見解は次のように解釈する。

(1) ローマ・カトリック

「パンとぶどう酒はキリストの物理的なからだと血『である』(are)」

(2) ルター

「パンとぶどう酒は物理的なからだと血を『含む』(contain)」

(3) ツヴィングリ

「パンとぶどう酒はからだと血を『象徴する』(represent)」

(4) カルヴァン

「パンとぶどう酒はからだと血を『霊的に含む』(contain spiritually)」

しばしばお伝えしていることではありますが、個人的には、聖餐式におけるパンと杯は、礼拝という場においては通常何の変哲もない飲食物であってもその「意味」が変化すると考えています。婚約者がエンゲージリングを指にはめるとき、それは本来「金属の輪っか」に過ぎないはずのものが、二人の間では「誓い」の意味を持つ物へと「意味変化」しています。同様に、聖餐におけるパンと杯は、主イエスと教会との「契約のしるし」となるのです。その意味では、「象徴説」に近い考え方と言えるでしょう。

さて、ハイデルベルク信仰問答の回答をもう一度読み直してみましょう。

「決してそうではありません。なぜなら、神性は捉えることができず、どこにでも臨在するのですから、確かにそれが取った人間性の外にもあれば、同時に人間性の内にもあって、絶えず人間性と人格的に結合しているのです。」

ここで言われていることを分かりやすく言い直すと、主イエスは「遍在」という神の性質によって、世界のどこにでも存在することができるし、もちろんのこと天にある「栄光のからだ」のうちにも存在しておられるということです。遍在なる神は、天地を遍く行き巡り、人の心の奥底を知り尽くし、聖餐のパンと杯においても信者と交流することができるお方です。インマヌエルなる神がどんな時にも私たちと共にいてくださるということが、この問答を通してより強化されているのです。